

シリーズ
教員の
働き方改革
spin-off 版
号外

学校と教育委員会のパイプ役 公立学校の「指導主事」を紹介します

「教員」ですが「指導主事」でもあります

学校では「教員」、事務局では「指導主事」と呼ばれています。今号では、シリーズでお届けしている「教員の働き方改革」のスピノフ版として、学校の教員でありながらその職務は行わず、教育委員会事務局内（本市では指導室）で、学校教育に係る専門的な事務を執っている「指導主事」にスポットを当て、別の視点から見た「教員の働き方改革」を考えたいと思います。

「教員」は「学校で子どもたちに授業や生活指導を行うことを職務とする公務員」ですが、市区町村教育委員会の事務局にも、「指導主事」という職名で、「公立学校の教員」が配置されています（本市では指導室）。「指導主事」は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律により、「市町村教育委員会の事務局に指導主事を置く」とされ、市教育委員会の処務規則においても「教諭の身分を持ちながら」教育課程、学習指導その他学校教育に関する専門的事項の指導に関する事務に従事する」と規定されています。

なお、「指導主事」には所属校がありますが、指導室に配属されているため、正式には一充て指導主事という名称になっており（以下「指導主事」と表記）、児童・生徒の学習や生活指導等に関わって教員に助言する立場にあり、これまでの教員としての経験に加え、さらに専門的知識を

市立
学校長に
聞く！



本市や区部で指導主事等を経験され、また、これまで多くの指導主事と関わってこられた2人の

「指導主事になった直後は市のシステムや関係団体等を知ることから始まり、本来の仕事をするまでに時間がかりますね。事務経験もあるということですが不安はなかったですか」

岡田校長 不安はありません。指導主事になるのは、「転職した」と言っても過言ではないです。指導主事の仕事量は想像以上に多くて驚きました。

岡田校長 小学校6年生の時に「小学校の先生になりたい」と思いました。当時の担任の先生に憧れて、小学校の教員になることに一直線でした。その先生に、「どうしたら小学校の先生になれるのか」と聞いたことも覚えています。出身大学を聞いてその大学に入りたいたいと思ひ、結果、その大学に入学して免許を取得しました。

岡田校長 教員になって小学校4校を回り、その間、担任や理科専科を経験しました。特例ですが、その後、都庁で道路行政を研修で1年間経験しました。本市の教育委員会の指導主事になったのは、教員になって17年後のことです。

「仕事が雨のように降ってくる」と言われましたが、学校も教育委員会もコロナ禍の対応に追われています。働く場所が学校ではありませんが、指導主事の仕事も事務改善を進めていく必要があると思うのですが

岡田校長 現在は同じく指導主事2人、統括指導主事1人の体制でした。初めは指導主事がどのような仕事をするのか全く分かりませんでした。先任指導主事の存在はとても大きかったです。些細なことでも、先任指導主事に聞いて仕事を進めていました。人間関係がいいことが仕事として成立する要因ですね。

岡田校長 多忙を解消するには先ずは業務の整理と、指導主事の配置人数が増えて分担できればいいのですが、多忙には気持ちの持ち方が影響する「多忙感」もあると思います。この解消には「仕事を楽しむ」として乗り切りました。

岡田校長 当時はあまり意識していませんでした。任期満了後に副校長になることが前提になります。そうなると思えばもうできませんが、かなえられた少年時代の夢をさらに一歩進みなさい」という心の声に押し寄せられたのかもしれません。それが意味大きな決



「心に残っているアドバイスはありますか」
(2面に続く)